

神出鬼没のネジバナを段ボールで育てよう

江別市 大沼 弘樹

ネジバナ。それは絶滅危惧種や希少種だらけのラン科の中では例外中の例外で、郊外から都会まで何処にでも現れる、いわば「超普通種」です。夏の草むらに、クルクルと振じれた可憐な花穂が見え始めると、つつい近寄って繊細な造形美を眺め、写真に撮りたくなります。しかし、多年草にもかかわらず、次の年には同じ場所を幾ら探しても見つからなかったり、そうかと思えば去年まで居なかったはずの芝生や庭先に現れたり、何とも神出鬼没な振る舞いをするのです。そして植木鉢に勝手に生えてきたかと思えば、いつのまにか消えてしまいます。

神出鬼没な理由は、はっきり解明されていないようですが、ネジバナ栽培にチャレンジした知人の経験者達からは、やはりラン科なので共生菌が関係しているのでは？との噂が聞かれます。

ところで、ラン科の種子発芽に共生菌が必要な事は良く知られていますが、ラン科植物の中には、なんと切ったダンボールを混ぜた用土に播種するだけで発芽する種類もあります。いわゆる「ダンボール播き」と呼ばれる方法で、山野草栽培の趣味家の方が開発、普及した方法のようです（東京山草会ラン・ユリ部会 2001）。このメカニズムもはっきり分かっていませんが、とにかく発芽することは確かです。そして、筆者も実験してみたところ、道内のネジバナにも応用可能な事が分かりました。方法

は簡単で、植木鉢に適当に刻んだ段ボール片を入れて、目の細かい火山礫系の用土（ホームセンターでも入手可）を混ぜ、埃のようなネジバナのタネを播くだけ。覆土はせず、混ぜる段ボールの量も適当で良いですが、用土容積の1-3割くらいの量が入っていれば好成績が得られるようです。用土に腐植質が入っていると、うまくいきません。

そのまま屋外に置いて乾かないように水やりしておけば、翌年には芽が出始めます。発芽は数年間に渡ることもあるので、諦めなければいずれ生えてくるでしょう。運がよければ、段ボールと用土を入れた植木鉢を屋外に置いておくだけでも、どこからか飛んできたネジバナが生えてきたりもします。

あとは、肥料などは特に与えず、乾いてきたら水やりして育てると、発芽の翌夏には花が咲いてきます。冬は根が強く凍結すると枯れるので、雪の下に鉢ごと埋めておきます。図1は、ダンボール播きした2年後の様子で、芽生えたばかりの実生から、開花サイズに近い苗まで混在しています。ダンボールは播種後2-3年もすれば腐り、ネジバナの生育も衰えてくるので、そうになったら早春か花後すぐに、新しい用土とダンボールで植え替えます。筆者は大抵、ネジバナの根をダンボール片で軽く1巻きして植えていますが、巻かずに植えたときより調子が良さそうです。実ったタネを根元に播いておけば、親株に寿命が来たと